

財団法人 知床財団 設立趣意書

知床半島に原生的自然が残されていました。半島は、知床連山が背骨を形づくり、稜線から山麓そして海岸へと急峻・狭あいな環境に存在する動植物の織りなす生態系が、その価値の根源となっています。海岸は、オホーツク海の荒波と流水の威力を示す断崖が連なり、直接海に落ちる滝や、群れ飛ぶ海鳥などが独特の景観を構成しています。また、ヒグマやエゾシカなどの大型獣が密度濃く生息し、シマフクロウ・オジロワシ・クマゲラなどの天然記念物指定鳥類が生き延びることができる原生林や自然河川が辛うじて残された地域となっています。

その原生自然に加えられた開発の経過が二つあります。一つは、大正・戦前・戦後の農地開拓であり、もう一つは昭和39年国立公園指定以降の利用開発です。第一の開発は、厳しい自然の前に夢やぶれ、過酷な開拓の歴史と離農地が残されました。その土地を買い取り森林を復元しようとする新たな夢...「夢を買いませんか!」と、昭和52年に「しれとこ百平方メートル運動」が展開されたのです。

第二の開発は、歌にある「しれとこの村」を、温泉観光地に変貌させるのに20年も要しませんでした。多くの利用者が訪れる知床の原生自然は、今や「秘境」のイメージが失われる危険性さえ出てきつつあります。

今、知床に課題が二つあります。「しれとこ百平方メートル運動」を通して全国から寄せられた夢を将来にわたって実現させる新たな課題と公園の原生的自然を永遠に保存し適正に利用する課題です。

「運動」が当初設定した目標は、間もなく達成されますが、それは引き続き斜里町の責任において実現します。「運動」の新たな課題は、買い取り目標とその資金目標を達成することと平行し、国民的な信託を受けたこの運動の精神を受け継いで、そのナショナル・トラスト資産を適正に公開利用し、維持管理し続けることです。森林の復元とそれに伴う動物相の回復を将来にわたって実現するための調査研究・管理活動、自然観察研修会などの教育活動の土地利用など新たな事業展開が必要とされています。

もう一方の命題「原生的自然の保全と適正な公園利用」を具体的に推進するために「自然トピアしれとこ計画」は、その方向性を示したものであります。それは公園の西口にあたるホロベツ園地を拠点に交通利用体系の確立、教育活動の推進、利用者へのサービス、環境保全を図る為の新しい自然利用の手法を導入し、将来に向けて知床の自然を維持し、イメージを高めようとする計画です。これらの事業展開を効果的に実施するために、行政を補完し、公園と運動地の保全と活用を使命とする永続的な組織として、この財団を設立しようとするものです。

「しれとこ」それは過去からの遺産であり未来からの預かり物、人類共有の財産です。長く後の世代に引き継いでいくための活動に対して、ご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

昭和63年9月23日北海道斜里郡斜里町
設立者 斜里町長 午来 昌(当時)